

日本文学を世界文学として読む

二〇一八年度「文学研究科プロジェクト」成果報告書

世界文学と「地方」	堀 まどか (1)
——野口米次郎とシカゴの詩雑誌『ポエトリ』	
片山廣子の新体詩「あかき貝」について	
——クリステイーナ・ロセッティ『シング・ソング童謡集』との関わり	永井 泉 (18)
『太平記』引用説話の典拠と文脈	
——英訳『太平記』の注記を端緒として	大坪 亮介 (32)
和歌と漢詩	
——平安朝における実例をめぐって	山本 真由子 (44)
芥川龍之介から堀辰雄へ	
——『玉書』の受容から見る東西意識	劉 娟 左 (31)
芥川龍之介「秋山図」など	
——世界文学としての芥川作品	奥野 久美子 左 (18)
『オデュッセイア』の類話における英雄像比較	
——オデュッセウス、百合若大臣、ポイヤウンペ	高島 葉子 左 (1)
あとがき	(i)



Urban-Culture Research Center

大阪市立大学大学院文学研究科 都市文化研究センター

Reading Japanese Literature as World Literature

World Literature and the Local: Yone Noguchi and *Poetry* - a Chicago Journal of Verse

HORI Madoka 1

An Analysis of the poem "A Red Shell (Akaki-kai)" by Hiroko Karayama:

The Influence of *Sing-Song: A Nursery Rhyme Book* by Christina Rossetti

NAGAI Izumi 18

Issues on the Sources and Contexts of the Stories quoted in *Taiheiki*:

Considering McCullough's Notes as a Clue

ŌTSUBO Ryōsuke 32

Waka and Sinitic Poetry: Examples in the Heian Period

YAMAMOTO Mayuko 44

From Ryūnosuke Akutagawa to Tatsuo Hori:

The Orient and the Occident in their Interpretation of *Le Livre de Jade*

LIU JUAN left 31

"Autumn Mountains (*Shūzan-zu*)" by Ryūnosuke Akutagawa:

Akutagawa's Works as World Literature

OKUNO Kumiko left 18

Odysseus, Yuriwaka-daijin, and Poyyaunpe:

A Comparative Study of the Heroic Tales in Ancient Greece, Japan, and Ainu

TAKASHIMA Yōko left 1

**Urban-Culture Research Center,
Graduate School of Literature and Human Sciences,
Osaka City University**

『オデュッセイア』の類話における 英雄像比較

—オデュッセウス、百合若大臣、ポイヤウンペー—

高島葉子

(要約文)

『オデュッセイア』と「百合若大臣」の類似は古くから指摘され、現在も類話の比較研究が原形や伝播経路の探究を目的に行われている。しかし類話の比較は物語と社会の関係を考察する際にも有効である。本稿では、『オデュッセイア』と日本とアイヌの類話における英雄像の違いに注目し、物語の社会における機能を考察した。

はじめに

蒙古討伐の英雄が主人公である「百合若大臣」は日本の代表的な英雄譚であり、伝説として語り継がれてきただけでなく、幸若舞曲、説経節、謡曲、浄瑠璃など様々な語り物文芸として作品化されてきた。この「百合若大臣」と「人類史上最高の文学」と称される『オデュッセイア (Ὀδυσσεΐα)』との類似性、共通性については、古くから指摘され議論されてきた¹。『オデュッセイア』は前13世紀半ばのトロイア戦争を舞台にした叙事詩であり、前8世紀半ば以降に成立とされている。ホメロス (Ὅμηρος) の作と伝えられてきたが、ミルマン・パリーの研究 (Parry, 1928) 以後、何世紀にも渡って形作られ、手を加えられて口承されてきた詩が、ギリシャ語で書き留められたものであることが明らかとなった²。ホメロスは詩人というより口承詩の継承者というべきなのである。この口承詩はユーラシア各地にその類話が存在することが知られている。

このような『オデュッセイア』と「百合若大臣」の類似は、偶然の一致なのか、ユーラシアを横切って伝播した結果なのか。この問いに答えるためには、ギリシャと極東の間に横たわる広大な中央ユーラシアの類話探究が必要となる³。従って、東西の伝承を繋ぐ類話探求が進められており⁴、北海道のアイヌ民族の伝承にも類話の存在が確認されている。広範囲に分布する類話の関係は如何なるものなのか。原形や伝播経路の探索が続けられているが、決定的な結論は出ていない。

『オデュッセイア』と「百合若大臣」の関連、伝播経路の研究は重要であり、今後も継続する必要があるだろう。しかし、本稿では、英雄像の違いという別の観点から考察を試みる。対象として、『オ

デュッセイア』と「百合若大臣」に加えて、北海道アイヌの類話を取り上げる。アイヌの類話を比較対象とするのは、日本と地理的に隣接し伝播、受容が想定されるが、その社会体制が異なるためである。「百合若大臣」が語られたのは中央集権的国家体制下の江戸時代であるが、アイヌ社会は首長制社会の前段階に位置づけられる部族社会である⁵。そして古代ギリシャもまた、首長制社会段階には達していなかった。それぞれの英雄は、「神に加護された者」などの共通点を備えているが、同時に相違点も認められる。全く異なる社会を背景とする「百合若大臣」とアイヌの類話においては、英雄像に違いが認められるのは当然のことだと言えるが、アイヌと古代ギリシャの英雄像も異なる。そこにはどのような背景社会の差異があるのか。本稿では、英雄像の違いを手掛かりに、物語の機能、およびその背景となる社会について考察する。そして、これによって、類話の比較研究が、伝播経路の解明だけでなく、物語の持つ社会的機能の解明に役立つ事例を示すことを目的とする。

1 共通の基本構造

まず、『オデュッセイア』の類話に共通する基本構造を確認しておく必要がある。基本構造は以下のとおりである。

本来「長」（族長、国司、村長）の地位にある者が、裏切りによって地位を奪われたのち、復讐を遂げて地位を回復する。

次に、それぞれの物語の概要を示しておく。

『オデュッセイア』概要（筆者による）

トロイア戦争終結後、オデュッセウスは故国イタケへの帰路、海神ポセイドンの怒りを買ったため嵐に襲われて漂流する。オデュッセウスは、部下一行と共に、怪物の襲撃、魔女との遭遇、冥界への旅を経たのち、再び船が嵐に飲み込まれて船と部下を失い、一人未知の島に流れ着く。美しい女神カリュプソと7年間島で過ごしたのち、女神アテネの計らいでようやく帰路に着く。その間、故国では妻ペネロペイアに再婚を迫る100人余りの有力者の息子たちが屋敷に集まり、家畜を屠り、侍女を侍らせて酒宴に明け暮れ、オデュッセウスの地位と財産の篡奪を目論んでいる。オデュッセウスは、みすばらしい老人の姿に身をやつして故国に20年ぶりに帰還し、屋敷の状況を知ると、息子テレマコスと忠義の隸僕（豚飼い）とともに復讐を計画する。宴会での弓の引き比べにおいて、オデュッセウスは自ら張った強弓でテレマコス殺害を企てた裏切り者を射殺し、その後、すさまじい戦いの末、アテネの援護を得て他の求婚者、不忠

の隸僕および奴隸（女中）をすべて抹殺する。翌日、老父の住む農園にテレマコス、忠義の隸僕二人（豚飼い、牛飼い）とともに赴くと、そこを殺害された者の親族たちが襲い戦いが起こるが、アテネの裁定により和解する。⁶

「百合若大臣」については、幸若舞曲「百合若大臣」⁷の概要を江戸時代に流行した「舞の本」に基づいて記す。以降、本稿で扱うのは幸若舞曲「百合若大臣」とする。

幸若舞曲「百合若大臣」（舞の本）概要（筆者による）

観音の申し子として生まれた百合若は、若くして右大臣に昇進し、大納言の姫君を妻とする。蒙古の大軍が2度にわたり襲来し、百合若はその追討を命じられ筑紫の国司となる。三年間の苦戦の末、鉄の弓矢をもって蒙古軍を撃退した。凱旋の途次、玄海が島に休息に立ち寄るが、勲功の横取りを企てた重臣別府兄弟の裏切りにより孤島に置き去りにされる。別府は百合若が戦死したと報告し、筑紫の国司に任ぜられ、百合若の御台所に懸想の文を送る。御台所はこれを拒む。御台所が百合若の寵愛する鷹・緑丸を放つと、緑丸は柏の葉に血でしたためた文を持ち帰り、御台所は百合若の生存を確認し宇佐八幡に無事の帰国を祈願する。島に漂着した壱岐の浦の釣人の船で百合若は筑紫に戻る。みすぼらしい餓鬼のごとき姿のために別府は百合若とは気づかず、元の家臣である門脇の翁に苔丸と名付けて預ける。別府が求婚を拒む御台所を池に沈める命令を出したため、門脇の翁は自身の娘を身替わりとする。正月の弓始めに、百合若は宇佐八幡の宝殿に納められた鉄の弓矢を所望し、これを手にして名乗りを上げ、別府を誅殺して復讐を遂げる。釣人には壱岐と対馬、門脇の翁には筑紫九ヶ国荘政所を与え、身替わりとなった翁の姫のために沈められた池の近くに御寺を、さらに緑丸のために都の乾に神護寺を建てる。やがて都へ上り、将軍に任ぜられる。⁸

アイヌの類話は北海道石狩・旭川に伝承される、トゥイタクと呼ばれる散文説話である。主人公による一人称語りである。

「海に浮かぶ山を泳いで引っぱったオタス人の話」（以下「オタス人の話」と表記）の概要（筆者による）

私（主人公、オタスの少年）は婆に養われて成長し、弓矢で川の魚を取るようになる。ある日私の叔父だと称する人が私を交易につれていく。婆は叔父が私を殺そうとしているのを知っていて、「何かの役に立つだろう」と私に下帯*をくれる。私は大きな舟に乗せられ、途中高い山の聳える島に一泊するが、翌朝私は島に置き去り

にされている。私は下帯を口にくわえて島を引っ張りながら泳ぎ、津波を引き起こす。叔父の舟は転覆し、浜の村々も津波に襲われ全滅する。島の山頂に男（カムイ・神）がいて私を戒めたので、私はその戒めに従って帯をしまい家へ泳いで帰る。婆が私の生い立ちを初めて話したところによると、私の両親一族は悪い者たちに殺されて私だけが生きのび、水のカムイである婆に育てられた。婆が海の底にもどったあと私は悪い村人たちを殺し、新たに村を作り、幸せな結婚をした、とオタスの老人は物語った。⁹

*女性の肌着の下につける帯、人には見せてはならないとされた。

母、祖母から娘に伝わる。初潮、嫁入りの際に与えられる。家の守り。（注は筆者による。）

以上のように、基本的構造は一致しているものの、設定や展開の細部はそれぞれ異なることが分かる。特に、アイヌの類話では、裏切り者への復讐が帰国前であること、また、身をやつして弓競いに参加して復讐を果たす場面が欠けており、復讐の手段が津波による舟の転覆である。

2 英雄像の比較

次に、それぞれ物語の英雄像を比較してみよう。共通点としては、三つ挙げることができる。①並外れた武勇の持ち主であること、②本来は「長」の地位にある者（族長、国司、村長）であること、③神の申し子あるいは神の加護を受けた者であることである。

トロイア戦争の英雄であるオデュッセウスが武勇に長けた人物であるのは無論だが、イタケの国を治めるバシレウス(βασιλεύς)でもある。バシレウスは英訳では“king”となっているが、『オデュッセイア』の描く社会を前提とすると、「王」というよりも「族長」を意味すると理解すべきである¹⁰。③としては、オデュッセウスは女神アテネの加護と援助により帰国を果たし、地位・財産と妻を奪おうとする有力者たちに復讐する。百合若大臣も鉄弓にて蒙古軍を撃退する猛勇の武将であり、筑紫の国司である。そして、生まれは観音の申し子とされる。アイヌのオタス人は、ある村の村長の息子であったが、村を襲撃され、両親、一族を皆殺しにされて一人生き残ったとされる。その後、水のカムイに育てられ、その加護により復讐を遂げる。カムイの加護があるとはいえ、一人で敵を悉く倒す勇士である。このように主人公には①、②、③の共通性が認められる。

では、相違点はどのようなであろうか。まず気づくのは、百合若大臣とオデュッセウスは、国司、族長という地位にある壮年男性であるのに対し、オタス人は、まだ養育者の庇護のもとにある未熟な少

年として登場することであろう。

そしてさらに行動に注目すると、オタスの少年には顕著な特徴が認められる。百合若大臣とオデュッセウスは帰国後、正体を隠して慎重に機会を待ち、策を講じて裏切り者を倒す思慮深い策略家である。他方、アイヌの少年英雄は、その未熟さが行動に顕著に表れており、怒りに任せて魔法の下帯で島を引っぱりながら泳いで津波を起こし、復讐の相手ばかりか罪のない人々の村々まで破壊する。

その下帯の玉のようにたたんであったものを山に向かって飛び伸ばし(ママ)、それを引っ掛けて、それから片一方をくわえて沖へ向かって泳ぎました。すると、その大きな島は、グラグラ揺れるとさえ思われぬものでしたが、後ろからついてきます。すると、今までは波一つない海の面でしたが、…海は家ほどもある波を押し合うようにして作り、高まり、荒れてきました…怒っていましたが、がんばって泳ぎ続けました。…おじさんたちは、舟とともにひっくり返って死んでしまいました。私はそれを確かめました。怒っていましたが、がんばって進んで行きました。すると、村がありました。その村も津波に見舞われていて、私はその村も全滅させました。それから、またさらに進みますと、…前方に波が激しく起こり、津波となって、多くの村々をすべて滅し尽したのを見とどけました。¹¹

ここでは、少年は罪のない人々の村々を破壊してしまったことに良心の呵責を感じることなく、怒りにまかせて泳ぎ続ける。自分を陥れた者に対して復讐する点は、いずれの英雄も同様だが、オタスの少年のみ衝動的な行動によって達成する。しかも留意すべきは、激しい怒りを制御することができず、無関係な人々までも殺害することである。この点は、百合若大臣ともオデュッセウスとも大きく異なる。彼らは裏切り者を殺害するが、罪のない者は傷つけない。

こうしたオタスの少年の際立った特徴は、アイヌのユカラ（英雄叙事詩）の主人公、ポイヤウンペの特徴そのものである。次にこの点に注目しよう。

3 アイヌ英雄譚の社会的機能

「オタス人の話」はすでに述べたように、散文説話であり韻文で語られる叙事詩ではないが、叙事詩的英雄像が見られる。これを踏まえて、三つの類話のなかで、まずこの物語の機能を考えてみる。

3-1 アイヌ口承文芸のジャンル

ポイヤウンペ英雄譚について述べる前にまず、北海道アイヌの口承文芸のジャンルについて簡単に説明しておく。

アイヌ口承文芸には大きく分けて、神謡・カムイユカラ（以後カムイユカラ）、英雄叙事詩・ユカラ（以後ユカラ）、散文説話であるウエペケレまたはトゥイタクの三つのジャンルがある。カムイユカラとユカラは韻文（節をつけて）で語られ、散文説話は散文で語られる。使用される文体もジャンルで異なり、カムイユカラとユカラは雅語で、散文説話は日常語で語られる¹²。語られる内容も異なる。カムイユカラの主人公はカムイである。カムイはアイヌ独特の観念であり、人間以外の動植物およびすべての事象の「人間にない力を持ったもの」¹³である。カムイはその本来の世界（カムイモシリ）では人間の姿をしているが、人間界（アイヌモシリ）ではそれぞれの衣をつけて動植物、事物、現象として存在すると考えられている。

カムイユカラは、このような様々なカムイが一人称で自分自身の体験談を語る物語である。ユカラには二種類ある。いずれも英雄の一人称による自叙である。一つ目は主人公であるアイヌラックル（人間臭い人）つまり半人半神による祖神・文化英雄物語である。地上世界の悪なる存在や魔物を退治したり、人間に獲物を与えたり、天界から道具や工芸をもたらしたりする。二つ目は少年勇者ポイヤウンペを主人公とした闘い中心の冒険物語であり、やはり一人称で語られる。散文説話には4種類の話群が存在する。このうち2種は三人称で語られ、和人社会の影響のもとに形成された話群と考えられている¹⁴。アイヌ固有のものは「カムイの物語」と「人間・アイヌの物語」であり、いずれも一人称で主人公であるカムイあるいは人間が自分自身の体験談を語る。

上記の中で「オタス人の話」は散文説話（トゥイタク）であるが、主人公はユカラの主人公ポイヤウンペの特徴を持つ。

3-2 ポイヤウンペの反倫理性

ポイヤウンペ・ユカラは主人公と怪物や敵との戦いを中心に展開する物語である。戦闘に明け暮れる主人公は、超人的な身体能力を持ち、圧倒的な強さで敵を倒し続ける。多くの敵は主人公の山城にある宝を奪おう目論んでいる。しばしば殺された主人公の父親は村長だったという設定で、親の仇が戦いの理由とされることが多いが、戦いの勝利に特に積極的な意味はなく、戦利品の獲得もない。戦いが終われば城での平穏な生活に戻るだけである。

主人公はポイヤウンペあるいはポンオタストゥンクルなど地方によって呼称が異なる。前者は「小・陸の・人」＝「北海道の若者」、後者は「小・オタスの・人」＝「オタスの若者」（オタスは英雄の住んでいる地域名）という意味であり、固有名詞ではなく綽名である。そして、ここで注目したいのは、その人物造形である。

アイヌの少年英雄は、超人的身体能力をもちながら、思慮分別に

欠け、衝動的に行動するため、途方もなく危険な人物である。織田ステノによる口述ユカラから具体的描写を見てみよう。まず主人公が初めて狩りに出かける場面である。鳥のように空を飛びながら獲物を探し¹⁵、鹿を見つけ矢を放ち、命中を確認して鹿の倒れた場所に降りる。以下その後の行動である。

大きな雄鹿は / 大きな目を見開いて / 白目を / むいて / 私を睨みつけている。 / 私は腹が立ったので、 / 何の悪口を / いうので / 私を睨みつける / のだろうか。と / 思いながら、 / 両足を / つかんで / 土に叩きつけ / 草に叩きつけた。¹⁶

死んだ鹿が自分を睨みつけていると思い、地面に叩きつけている。常軌を逸した行動である。ユカラの少年英雄は戦いの場面ではさらに、衝動的な行動が目立つ。

カニオトプウシ / 年長の兄さんは / … / 私をねぎらった。 / すると私は何をしたのだか / 我を忘れてしまった。 / 気がつく / カニオトプウシ / 神の兄さんの / 頭だけを / 土に叩きつけ / 草に叩きつけている / ところに / 正気を取り戻したのだ。¹⁷

ここでは、主人公は兄とは無関係なことで腹を立てていたのだが、弟をねぎらおうと近づいてきた兄を、怒りで理性を失っていた主人公はいきなり殺してしまう。

このような衝動的行動はユカラの主人公の特徴である。戦いに無関係な相手までも、頭に血が上ると容赦なく惨殺する。親の復讐や怪物退治など戦いの理由は設定されてはいるが、上記の事例のように、主人公は目前に現れた相手と理由もなく次々と戦い始める。罪のない相手であろうと容赦ない攻撃を加える。こうした主人公の行動により、ユカラそのものが反倫理的世界観を示すものとなる。罪無き者を殺害したとしても、主人公が咎められることはない。これは、アイヌ口承文芸のもう一つの間人が主人公となるジャンル、散文説話とは全く異なる特徴である。このジャンルは、「勸善懲悪」「因果応報」という道徳原理に支配された世界観を提示する。正しい心を持った者は必ず報われ、悪い心をもった者、悪行をした者には必ず罰が下されるのである¹⁸。これはアイヌ社会を律している倫理観そのものである。散文説話は秩序維持を目的として語られたと考えられる。従って、ユカラはこれとは正反対の目的、すなわち秩序転覆の目的で語られたと推定できる。つまり正反対の目的を持つジャンルが併存していたと言えるのである。秩序維持だけでは社会は閉塞する。相反するジャンルは、語る相手や語る場の違いによっ

て語り分けがなされ、結果として補完的に機能していたのだろう。

3-3 散文説話に組み込まれたポイヤウンペ

では、散文説話でありながらポイヤウンペ的主人公の物語である「オタス人の話」は、どのような機能を持っていたのか。原題は「Otasut un ekaci yay'isoitak（オタス老人の自叙）」であり、ポイヤウンペの別名ポンオタストウンクル（オタスの若者）との関連を示唆している。オタスの男が死ぬ間際に、自分の若いころの出来事を子供たちに自ら語るという物語である。これは、まさに散文説話の典型的なパターンである。つまり、ユカラの反秩序的英雄を散文説話の枠組にはめ込んでいるのである。

以下の引用(1)は、少年が引っ張っていた島の山に姿を現したカムイが主人公を戒め、反省を促す場面であり、(2)は、物語の結末部で、主人公が自分の子供たちに自ら人生を語り聞かせる場面である。

(1) カムイが主人公を戒める場面

「これこれ、少年よ、私の言うことを聞いてください。なにを怒ったとはいえ、すでにたくさんの村をこんなに滅ぼしたのだから、…これからはこらえて、分別しもう山を引っぱってはいけません。そうすれば、これ以上の村は滅びることはないでしょうから、私の言うことを聞きなさい。もし言うことを聞かないなら、お前を殺してしまいますよ。」と、山の上に立っている人が言ったので、考えてみますと、「ほんとうに激しく怒り過ぎたから、既に多くの村が滅びてしまったのだと、神様は言うのだな。神様の言うことを聞かぬと悪い。」と思ったので、その下帯をたたんで、きれいにたたんで、着物の中に入れました。それから泳いで陸に上がりました。¹⁹

(2) 「オタスの人の話」結末部

村の下から村の上へと駆け巡り、悪い心を持ったものをみんな殺しました。みますと、かろうじて生き残った子供がいます。その子供を一箇所に集めて、小さな村を（作って）自分の廻りに住ませ、ある高貴な婦人…といっしょになりました。それから、男の子や女の子を産んで、このように語ってきかせました。「どんなわけでもこうして居られるのかといえば、ある歳をとったおばあさんが私を育て、お守り下さったからです。というのも女の下帯を私にくださったおかげで命を救われたものですから。そこでこのようにお話できるんですよ。」とオタスの老人は物語りました。²⁰

(1)は主人公を道徳規範に従わせる働きをしており、主人公に改心させることで散文説話的人物へ修正している。主人公はカムイの叱

責により反省し、行いを改める。さらに、主人公はその後両親と村人を全滅させた者たちを殺戮して復讐を遂げるわけだが、この時、水のカムイの計らいで、ポイヤウンペ的破壊性は「心がきれいな子ども」には及ばない²¹。従って、結果として悪行を行った者が報いを受ける話となっており、警告譚の機能を持っていると言える。

(2)は散文説話の典型的な結末のパターンである。散文説話では、正しい心を持ち規範に沿って行動する村長（あるいはその妻）が、カムイの加護を得て窮地を乗り越えて幸福な生涯を送る。結末部では、主人公がその生涯を子孫に語るという形式をとる。この物語の主人公も村再興後は村長として幸せに生涯を全うすることとなり、カムイの加護のある者は、たとえ本来の地位を奪われたとしても、それを奪還し幸福な生涯を送るというメッセージで締めくくられる。

このように、この物語は散文説話の持つ秩序維持機能によって、ポイヤウンペ的主人公の反秩序的破壊性が制御された結果、警告譚となっている。ただし、前半の叔父に対する怒りがポイヤウンペ的な無差別破壊行為として描かれているため、警告性が弱められている印象を拭えない。

次に、『オデュッセウス』と「百合若大臣」の機能についての考察に進もう。これらもおそらく警告譚の機能を持つだろう。

4 『オデュッセウス』と「百合若大臣」の社会的機能

4-1 警告譚としての機能

すでに指摘したように、語られた社会体制は異なるものの、百合若大臣とオデュッセウスはかなり似た人物造形がなされている。また、物語の展開も大筋で一致しており、モチーフ構成を示してみると、それは明らかである。

- ①神の申し子（神に加護された者）が、②戦いの後、③離れ島に流れ着き（置き去りにされる）、④援助者の手助けで帰国し、⑤身をやつして裏切り者に近づき、弓の腕比べにて名乗り上げ、⑥裏切り者を殺して復讐をとげ、⑦長の地位に戻る。

下線部はアイヌの「オタス人の話」には欠けたモチーフであり、それゆえ、百合若大臣とデュッセウスの際立った共通点でもある。両者は、身をやつして復讐の機会を待ち、そして確実に敵を討ち取る。こうした物語構成から考えると、両者の提示する世界観は「悪行を行う者は必ず罰を受ける」という観善懲悪的なものである。また、既に指摘したように、いずれの英雄も罪のない者を攻撃することはなく、倫理的正当性が担保されている。さらに、両者とも神の加護の下にあると設定されている。百合若大臣は観音の申し子であ

り、オデュッセウスは女神アテネに常に見守られ、援護されている。こうしたことから、倫理的正当性に加えて、神による地位の正当性をも顕示されていると言える。従って、これらの物語は、地位篡奪を目論む者への警告の機能を持つと考えられる。この点から考えると、アイヌの「オタス人の話」は警告譚としての効果が相対的に弱い。前述のとおり、神に叱責されて反省するとは言え、ポイヤウンペ的主人公の無差別殺人の印象が強いため、叔父の悪行が翳む。

4-2 裏切り者の罪とその誅罰、報復

しかし、詳細に見ると「百合若大臣」と『オデュッセイア』には興味深い違いも認められる。それは、敵の罪状とそれに対する主人公の誅罰方法、さらに復讐を遂げた後の行動である。

まず、罪状を確認しよう。「百合若大臣」では、重臣である別府が百合若を島に置き去りにし、死んだと報告して自ら国司となる。また、求婚に応じない御台所の命を奪う命令を下す。他方、『オデュッセイア』では、オデュッセウスが孤島に留め置かれているのは、ポセイドンの怒りのためであり、部下や仲間にも陥れられたわけではない。オデュッセウスの復讐の相手は近隣の有力者の息子たちであり、彼らの罪はバシレウスである夫の死が定かでないにも関わらず、再婚の意志のないペネロペイアに求婚し、さらに毎日のように館に集まり、許しもなく家畜を屠殺して宴会を催き、財産を消尽しようとしていたことであるとされている。

ペネロペイアへの求婚は、別府の御台所への求婚とは異なり、重要な意味があるので、ここで少し説明が必要であろう。ペネロペイアの父親は財力のある有力者の一人である。これは息子テレマコスへの女神アテネの次の言葉からも明らかである。

... and for your mother, if her heart bids her marry, let her go back to the hall of her powerful father, and there they will prepare a wedding feast, and make ready the gifts in their abundance, all that should go with a well-loved daughter.²²

このような女性を妻にすることは、大きな後ろ盾を持つことになり、オデュッセウスのバシレウスという地位も妻の父親の財力と無縁ではないのである。従って、ペネロペイアへの求婚はバシレウスの地位篡奪の意図を意味する。比較してみると、主人の地位を事実上篡奪したのであるから、別府の罪がより重いことが分かる。

次に、誅罰方法を見てみよう。「百合若大臣」では、別府は許しを請うが、百合若大臣は許さず、捕えて舌を抜いた後にさらに首挽の刑に処す。ただし、別府の弟については、島で百合若を殺害しよ

うとした兄を止めたという理由で流罪とする。

別府も走り降り、「降参なり」とて、手を合する。いかでか許し給ふべき。松浦党に仰付、高手小手に縛め、懸りの松に結び付け、自身立出給ひて、「汝が舌の囀りにて、我に物を思はする、因果の程を見せん」とて、口の内へ御手を入、舌をつかんで引抜いて、かしこへがはと投げ捨て、首を七日七夜に挽首にし給へり。上下万民おしなべて憎まぬ者はなかりけり。弟の別府の臣をも、同じごとく罪科あるべかりしを、島にて申言葉の情を、有のまゝ申。「さらば、汝をば流罪にせよ」とて、壱岐の浦へぞ流されける。²³

別府兄にたいする抜舌、挽首は極めて残酷な刑である。しかし、別府に従って大臣を島に置き去りした他の家臣、さらに別府の命令にて求婚を拒絶した御台所（実際には翁の娘）を池に沈めた者など、他にも処罰すべき者がいたはずだが、すべてお咎め無しである。つまり、大臣は首謀者の別府兄のみ極刑に処し、協力者には慈悲を持って対処している。これはオデュッセウスとの大きな違いである。

オデュッセウスの誅罰は誰も免れることができない。第 14 歌から第 21 歌で復讐計画が周到に進められていく様子が丁寧に語られた後、第 22 歌で篡奪者への復讐が血なまぐさい残酷な戦闘場面として描かれる。まず、首謀者であるアンティオノスの喉を射抜いた後、館の宴に集まっている求婚者を悉く惨殺する。オデュッセウスは、命乞いをするエウリュマコスに対して、次のように応じる。

Then with an angry glance ... Odysseus answered him:
“Eurymachus, not even if you suitors should give me in requital all your patrimony, all that you now have and whatever you may add to it from elsewhere, not even so would I henceforth stay my hands from killing until the suitors had paid the price of all their transgression. Now it lies before you to fight in open fight, or to flee; if any man may avoid death and the fates; but I do not think anyone shall escape from utter destruction.”²⁴

さらに、不忠の隸僕である山羊飼および求婚者たちと通じた女中たちまでも処刑する。オデュッセウスの命令に従い、息子テレマコスは残酷な方法で彼らを処罰する。

So he spoke, and tied the cable of a dark-prowed ship to a great pillar and cast it about the round house, stretching it high up that none might reach the ground with her feet. And as when

long-winged thrushes or doves fall into a snare that is set in a thicket, as they seek to reach their roosting place, and hateful is the bed that gives them welcome, even so the women held their heads in a row, and round the necks of all nooses were laid, that they might die most piteously. And they writhed a little while with their feet, but not for long.

Then out they led Melanthius through the doorway and the court, and cut off his nose and his ears with the pitiless bronze, and tore out his genitals for the dogs to eat raw, and cut off his hands and his feet in the anger of their hearts²⁵.

恐ろしい処刑場面である。確かに誅殺された人物たちは全員それぞれに罪があるが、これほど残虐な処刑が必要なのだろうか。死罪に値するとすれば、テレマコス殺害計画だけではないのか。罪と罰の対応を「百合若大臣」と比較した場合、警告譚としての効果は遥かに大きい。

最後に報復達成後の展開を比較してみよう。百合若大臣は、恩を受けた釣人と門脇の翁に褒賞を与え、命を落とした翁の姫と鷹・緑丸にそれぞれ御寺を建造する。そして、自らは朝廷から武家の最高権威である征夷大將軍に任命される。そして語りは「さてこそ、天下太平、国土安穩、長寿長遠なりとかや」²⁶と結ばれている。他方、オデュッセウスは惨殺された求婚者たちの親族が報復に来ることを予期し、翌日、父の農園に赴き、息子テレマコス、父ラエステル、忠義の隸僕二人とアテネの加護を得て敵の襲撃を迎え撃つ。再び激しい戦闘が起こり、敵が全滅寸前にアテネが介入してようやく和解に至るのである。

この違いは重要である。ここで注目すべきは、『オデュッセイア』にて誅罰された求婚者の親族が報復を企てる点である。この報復の応酬が「百合若大臣」では起こらないばかりか、將軍に任命される結末によって、百合若大臣の権威は揺がぬものとなり、天下太平となる。さらに、「オタス人の話」でもこの報復の応酬は起こらない。オタスの英雄も復讐達成後は村を再興し、村長として幸福な暮らしを送ると語り終わるのである。

ここには物語が語られた社会が反映されていると考えられる。これについては、上述のオデュッセウスの求婚者および不忠の隸僕に対する過剰とも言える報復とも合わせて考察する必要がある。

5 英雄譚の社会的背景

5-1 中央集権社会と部族社会

幸若舞曲は室町時代後期から江戸時代初期に盛行したが、本稿

で考察の対象としている「百合若大臣」（舞の本）は江戸時代に流行した流布本である。従って「舞の本」を基に考察するに当たっては、江戸時代の中央集権的政治体制を念頭に入れる必要がある。もはや戦国時代の下剋上の社会ではなく、徳川将軍家による幕藩体制成立を前提にしなければならない。こうした権力の安定が、首謀者別府兄のみの死罪、百合若大臣の将軍任命、天下太平の結末に反映している。門脇の翁が娘を御台所の身替わりとして差出し、娘もそれを拒まぬことにも、忠君を徳とする価値観の内面化が反映している。室町時代の幸若舞曲との異同点を検討する必要はあるだろうが、部族社会段階であった古代ギリシャとの比較であれば、室町時代の日本も、朝廷と幕府の存在を鑑みれば、前8世紀のギリシャ社会より中央集権化が進んでいたことは明らかである。

『オデュッセイア』の物語舞台は紀元前二千年紀のミュケナイ時代であるが、描かれている社会は前10世紀から前8世紀頃、ポリス成立前夜の時代と見積もられている²⁷。桜井万里子によれば、ホメロスの社会において貴族・有力者が依拠しているのは「高貴な生まれと富、つまり出自と家産」²⁸であり、彼らは世襲の「家」を立脚点として、様々な「集合活動への参加を通して、政治への参加をはたしポリスを運営していた」²⁹という。つまりバシレウスには「王」とう訳語から連想される権力はなく、貴族の中で相対的に力がある者というにすぎないと考えるべきなのである。それゆえ、バシレウス不在中に有力者が挙って財力ある父の娘であるペネロペイアに求婚し、その夫の財産を食いつぶそうとするのである。この状況がバシレウスという地位の不安定さを証言している。従って、その地位は常に危険にさらされているのであり、篡奪を目論む者に警告を発する必要があることが分かる。

こうした社会を前提に考えると、『オデュッセイア』がオデュッセウスの報復で物語が終わらず、最終歌で息子たちを惨殺されたイタケの有力者が反撃してくるのも理解できる。先述のように、この報復の連鎖を断ち切るのはアテネ神の介入である。しかし、興味深いことに、「引き分けよ」というアテネの一度目の制止の声にオデュッセウスは耳を貸さず、武器を捨てて逃げる敵になおも恐ろしい叫び声をあげて襲いかかる³⁰。これに対し、アテネは戦いを止めねばゼウスの怒りを買うぞと、以下のように忠告する。

“... Odysseus of many devices, hold your hand, and stop the strife of war, common to all, for fear Zeus son of Cronus, whose voice is borne afar, may perhaps become angry with you.”³¹

この言葉により漸くオデュッセウスも武器を置く。女神の脅しとも

とれる忠告なしには和解が成立しない社会であり、これは「百合若大臣」の提示する世界とは隔絶の感がある。『オデュッセウス』の社会は、有力者の勢力が拮抗する状態にあり、勢力争いが熾烈であると推察できる。

5-2 憎しみと敬意

上掲のアテネの忠告によりオデュッセウスが攻撃を止める場面は、オタスの少年がカムイに叱責される場面を想起させる。しかし、カムイが戒めるのは罪なき者まで殺してしまう無差別破壊であり、報復の応酬ではない。この違いに注目して『オデュッセイア』と「オタス人の話」の背景について最後に検討してみたい。

『オデュッセイア』における報復の応酬について考えるに当たって、興味深い事柄がある。それはオデュッセウスという名の意味である。第 19 歌に母方の祖父による名付けの場面があるが、ここで *Ὀδυσσεύς* (オデュッセウス) は *ὀδυσσάμενος* (激怒するもの) に由来することが明らかにされる³²。この語の原形は、*ὀδύσσομαι* (～に対して怒る) である。A.T.マリー(A.T. Murray)は *ὀδυσσάμενος* を “will pain to” と訳しているが、松平千秋は「憎まれる」と解釈している³³。いずれの解釈が正しいかは議論のあるところであろうが、ここで重要なのは、オデュッセウスが「憎しみ」や「怒り」を意味する言葉に由来するという点である。つまり、バシレウスの地位にあることは憎しみや怒りを生むと解釈できる。地位の篡奪を企てられ、それに報復すれば、さらに反撃を受ける。この憎しみの連鎖をオデュッセウスの名自体が示唆しているのである。神の介入なしには和解することが不可能な地位を持つ者と持たない者との対立が、『オデュッセイア』には描かれており、これは篡奪を目論む者への警告に留まらず、族長の地位にある者に対しても、常に反感を生む危険があることを警告している。これも勢力争いが熾烈な社会であったからであろう。

それでは「オタス人の話」はどう考えるべきか。バシレウスに対応する村長はどのような存在なのか、改めて検討してみよう。

先述したように、この英雄譚は、地位と財産の篡奪を目論む者への警告譚の機能を持つものの、主人公のポイヤウンペ的破壊性のためにその効果は弱められている印象を与える。むしろ、主人公をも含めて、正しい心を持ってカムイの加護を得なければ幸福にはなれないというメッセージに回収されている。無差別に人や村を津波で滅ぼしていた主人公は、カムイの怒りによって改心し、村長として幸福な人生を送ることになる。そこで強調されるのは、報復の成功よりも水のカムイによる加護の有難さである。

このカムイの加護の大切さが強調される背景には、アイヌ社会に

おける村長の立場が関係していると考えられる。「オタス人の話」の後半、両親と村人を殺害した人々への報復達成後に、その敵の仲間から主人公が反撃されることはない。敵の中で生き残った子供を集めて村を再興し、村長として幸福な人生を送ったと語り終わる。つまり主人公の改心後に人々からの反感、憎しみが描かれることはない。主人公の報復行為は「村の下から村の上へと駆け巡り、悪い心をもったものをみんな殺した」³⁴と表現され、ポンヤウンペ的な凄まじさを感じさせるが、罪ある者だけが対象であり、これがカムイに認められた行為であることが示される。

ここで、アイヌ社会で村長がどのような地位であったか確認する必要がある。アイヌ社会も古代ギリシャと同様に部族社会であった。アイヌ社会には首長が存在したとされているが、社会の段階としては、首長制社会ではなく部族社会レベルであった。こうしたアイヌ社会では、やはり財力を持つ者（ニシパ）の中から首長が選ばれた³⁵。この点『オデュッセイア』の社会と同様である。しかし、アイヌ社会では、散文説話に語られているように、カムイをよく祀り規律を守る者がカムイの加護を受けて富を得ると考えられていたため、富を持つ者が敬われていたという³⁶。すべてではないが、首長は世襲化され、血統が神格化された場合も存在したという³⁷。これは、散文説話にカムイと人間の婚姻譚が多いことから推察可能である。こうしたアイヌの村長と古代ギリシャのバシレウスを比較してみると、富を持つ者が敬われたという点が異なっていると指摘することが出来る。これは、「富はカムイの加護の証」という観念がアイヌ社会に道理として浸透していたことを意味している。首長あるいは村長の地位は、おそらく古代ギリシャ社会のバシレウスより安定したものであったのであろう。

アイヌの口承文芸には、「オタス人の話」の改心前の主人公の特徴を持つポイヤウンペが活躍するユカラが存在する。散文説話で説かれる道徳律や秩序を根底から転覆させる少年勇者の物語である。こうしたジャンルの存在は、これに対立する秩序維持を目的としたジャンルの存在が前提となる。後者が無ければ前者の存在意義は無い。「オタス人の話」はこの二つのジャンルが組み合わさったものである。この話の場合には、ジャンルとしてのバランスを一つの散文説話のなかで実現する試みであったのかもしれない。しかし、この話型の類話は『日本昔話通観』に二話しか掲載されてない³⁸ことから考えると、あまり好まれなかったと言えるだろう。つまり、有効性が認められなかったと考えられる。ポイヤウンペは、ユカラの中でこそ英雄性を発揮するのである。

おわりに

以上考察してきたように、『オデュッセイア』、「百合若大臣」、「オタス人の話」は話型的には類似性があり、いずれも地位と財産の篡奪を目論む者への警告譚という機能があることも共通している。しかし、英雄像に注目して比較してみると、その「警告性」の強度には差があることが分かる。

秩序破壊的なポイヤウンペ的英雄が主人公であるアイヌ説話は、衝動的に罪のない者まで殺害されるため、却って警告性が弱まっている。百合若大臣とオデュッセウスは、計画的に裏切り者のみを誅罰する点では同様だが、百合若が首謀者のみ極刑に処すのに対し、オデュッセウスは不忠の隷僕や女中に至るまで悉く惨殺する。計画的である故、ポイヤウンペ的英雄以上に恐ろしく、最も強い警告性を発揮している。これは物語の結末で一層顕著である。「百合若大臣」では、英雄の慈悲と報恩が強調され、征夷大將軍に任命された百合若によって天下太平がもたらされる。ところが『オデュッセイア』では、報復の応酬が起り、女神の介入無しには平和が訪れないことが示される。こうした違いは英雄譚が語られた社会の違いに起因すると考えられる。「百合若大臣」の時代は、徳川幕府による中央集権的幕藩体制下にあり、もはや下剋上のない安定した社会である。しかし、部族社会段階である『オデュッセイア』の時代は、有力氏族の勢力が拮抗し、バシレウスの地位は極めて不安定なものであった。他方、同じ部族社会でも、富める者が敬われたアイヌ社会では、村長の地位は比較的安定したものであった。「オタス人の話」の希少な類話採録数は、秩序破壊的ユカラの英雄を勧善懲悪的散文説話に組み込んだ警告譚が、当時のアイヌ社会でそれほど必要とされなかったことを窺わせる。社会状況の違いが、モチーフ構成上の類似性にも関わらず、異なる英雄像を描くことになったのだろう。求められる英雄像は社会によって異なり、それゆえ、物語の機能も一様ではないのである。

口承文芸研究においては、広く分布する類話の比較考察から原形や伝播経路の探究が盛んに行われてきたが、類話をそれが語られた社会と関連づけて比較考察する研究方法によって、物語と社会の関係を明らかにすることが可能である。本稿では、伝播経路の研究とは異なる類話の比較研究の有効性を示すことを試みた。

¹ 坪内逍遙は1906年に両者が酷似していると指摘した（『早稲田文学』1906年1月号）。

² パリーの研究については以下を参照。Milman Parry, *L'Épithète traditionnelle dans*

Homère (Paris: Société Éditrice Les Belles Letres, 1928). W.J.オング『声の文化と文字の文化』桜井直文他訳、藤原書店、1991年、56頁[W. J. Ong, *Orality and Literacy: The Technologizing of the Word* (Methuen, 1982)] を参照。

- 3 例えば、大林太良は内陸アジアの英雄叙事詩との類似に注目し、内陸アジアを經由して「百合若大臣」が日本に伝播した可能性を指摘している。大林太良「百合若伝説と内陸アジア」（『フォークロア』第3号、1980年）、81頁。
- 4 近年では例えば、『鷹と鍛冶の文化を拓く百合若大臣』（三弥井書店、2015年）、『英雄叙事詩—アイヌからユーラシアへ』（三弥井書店、2018年）において、中国、韓国、中央アジア、ユーラシア各地に存在する英雄叙事詩が、それぞれの地域の専門研究者によって考察されている。
- 5 E.サーヴィスの社会進化論を参照。E. Service, *Primitive Social Organization* (New York: Random House, 1962).
- 6 Homer, *Odyssey I and II*, with an English Translation by A.T. Murray and revised by G. E. Dimock (1919; London: Harvard UP, 1995).
- 7 福田晃の説明では、「幸若舞曲は、鼓のハヤシによって乱舞する白拍子の舞曲を継承するもので、最初は鼓をハヤシとする舞に留まっていたが、十五世紀末ごろ越前に幸若太夫が出現し、「双紙」にもとづく演劇的要素を含む「曲目」が上演されることになった」ということであり、「読誦」の「カタリの進行に伴って、ハヤシの鼓・琵琶が用いられることに特徴がある。」[「日本の語り物文芸—英雄叙事詩をめぐって」（荻原眞子・福田晃編『英雄叙事詩』三弥井書店、2018年）、34頁]
- 8 麻原美子・北原保雄校注『舞の本』新日本古典文学大系 59（岩波書店、1994年）。
- 9 『英雄の物語 アイヌ無形民俗文化財記録第2輯』（アイヌ無形文化伝承保存会、1982年）、205-223頁。
- 10 吉川晴風編『ギリシャ語辞典』（大学書林、1987年）では、バシレウス(βασιλεύς)の意味として「王」の他に「君侯」「支配者」「族長」が記載されている。
- 11 『英雄の物語』、215-217頁。
- 12 中川裕『アイヌの物語世界』（平凡社、1997年）、203頁。
- 13 同書、23頁。
- 14 稲田浩二・稲田和子編『日本昔話ハンドブック』（三省堂、2001年）、241頁。
- 15 ユカラの主人公は憑神によって超人的能力を発揮し、飛行能力もその一つである。
- 16 静内町教育委員会編「ユカラ2」（『静内地方の伝承 I 織田ステノの口承文芸(1)』、静内町郷土史研究会、1991年）、151-152頁。
- 17 「ユカラ1」同書、72頁。
- 18 中川、前掲書、91-92頁。
- 19 『英雄の物語』、217-218頁。
- 20 同書、223頁。「老人」は日本語訳では「少年」となっているが、アイヌ語原文は「ekaci（老人）」なので、「老人」とした。
- 21 同書、221頁。
- 22 *Odyssey I*, p. 33. (Book 1: 276-268.)
- 23 『舞の本』、67-68頁。
- 24 *Odyssey II*, p. 349. (Book 22: 60-67.)
- 25 *ibid.*, pp.379-381. (Book 22: 465-476.)
- 26 『舞の本』、69頁。
- 27 桜井万里子『古代ギリシャ社会史研究—宗教・女性・他者—』（岩波書店、1996年）、130頁。
- 28 同書、9頁。
- 29 同書。
- 30 *Odyssey II*, p. 451. (Book 24: 530-540.)
- 31 *Odyssey II*, p. 453. (Book 24: 542-544.)
- 32 *ibid.*, pp. 264-265. (Book 19: 405-409.)
- 33 *ibid.*, p.265. ホメロス『オデュッセイア（下）』松平千秋訳（岩波書店、1994年）、194頁。
- 34 『英雄の物語』、222頁。
- 35 瀬川拓郎『アイヌの歴史—海と宝のノマド』（講談社、2007年）、56頁。
- 36 中川、前掲書、80-81頁。
- 37 瀬川、前掲書、57頁。
- 38 稲田浩二・小澤俊夫編『日本昔話通観第1巻 北海道（アイヌ民族）』（同朋舎、1989年）、697-698頁。

「研究科プロジェクト」成果報告書
『日本文学を世界文学として読む』

平成三十一年（二〇一九）三月三十一日発行

編集 山本 真由子

発行 大阪市立大学大学院文学研究科
都市文化研究センター

〒五五八―八五八五

大阪市住吉区杉本三―三―一三八

電話〇六―六六〇五―三一―一四

印刷 博進印刷株式会社

〒五五九―〇〇〇二

大阪市住之江区浜口東二―七―二四
